NO.17

MY FIELD

MY FIELD とは…
原村の地域おこし協力隊が発行するかわらばんのことです。
原村で暮らす、おもしろくて素敵なひとを紹介します。

「粘土屋きのとり / クラフト市実行委員」
小嶋　匡一さん（52）

東京出身。結婚後、33歳まで東京で生活をしていたが、都会よりも田舎で暮らしてみたいと19年前に原村へ移住。現在は会社員として働く傍ら粘土クラフト作家「粘土屋きのとり」として活動。八ヶ岳クラフト市の実行委員を務めながら自らも出展し、ちょっと不気味でかわいい粘土作品を作られている。

八ヶ岳クラフト市 秋の市 10月26•27•28日開催

技よりも感性でものづくりをしたい。自分の中にある『火』を消さずにいたい。

都会での暮らしより、なんとなく漠然と田舎暮らしを考えるようになったと話す小嶋さん。「都会の夏は暑いし、この喧騒の中で10年、20年と暮らし続ける未来が思い描けませんでした。そんな場所にいるよりも、田舎に移住すれば何かが変わる気がしたんです。」と当時を振り返る。

移住先を探していた折に田舎暮らしの本で原村を知り、調べ始めてから半年～1年程で住まいが決まり移住を決めた。

移住後も会社員として働いていたが、「原村で暮らし始めたら、周りには好きなモノを作ったり自由に生きてる人々が多くて刺激を受けて、自分も何かやりたいと思いました」と話す。

専門学校で服飾デザイナーを目指していた小嶋さん。もともと手先が器用で得意だった粘土で作品を作り始めた。

「自分は技を極める『職人』にはなれません、目指すとしたら芸術家です。技よりも感性でものづくりをしたいです」と語ってくれ、自分で自分を肯定し、いつか誰かがすごく気に入ってくれたり、認めてくれることを信じて作品を作り続けているという。年を重ねても自分の中にある『火』を消さずにいたいと、ものづくりへの想いを語る。

毎年、夏と秋に八ヶ岳自然文化園で開催している「八ヶ岳クラフト市」では、自身が作家として出展する傍ら、実行委員も務めている。いまや全国規模で大人気イベントである八ヶ岳クラフト市。今後は若いメンバーの力を交え、いつか日本一魅力的なクラフトイベントになることを目指していきたいと話してくれた。

「内容をもっと充実させて、日本中の素晴らしい作家さんたちが、自ら出展したいと思ってもらえるような魅力あるイベントにしていきたい。そのためには、これからは自治体との連携が不可欠です」と、村と協力し合ってクラフト市を盛り上げ、原村の魅力も沢山の方に知ってもらえるイベントにしたいと語ってくれた。

いつもニコニコと穏やかな印象の小嶋さん。その内には静かな情熱と、まだまだこれからという向上心が垣間見える。

NEXT MY FIELD No.18は、八ヶ岳自然文化園専務の林 誠二さんをご紹介！次回をお楽しみに～◎